



森
敦

われ逝くものごとく

講
談
社

われ逝くものごとく

一九八七年五月三十日 第一刷発行
一九八八年二月二十四日 第六刷発行

著者——森 敦

© Atsushi Mori 1987, Printed in Japan

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—四五二二二（大代表）

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——三二〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

われ逝くものごとく

近^{ちか}くものかくのごときかな
昼夜^{ひよ}を舍^すかず

羽越本線が日本海を離れて、庄内平野に入ろうとするとき、なおその眺望を遮ろうとするように、左手に荒倉山あらくらやまが見え、それに連亘する高館山たかだてやまが見えて来ます。荒倉山の麓には西目にしめがあり、高館山の麓には大山おおよまがある。西目は酒所大山さかどころに比ぶべくもない村落ですが、かつて荒倉山が出羽神社を勧請かんじようして、西の羽黒と呼ばれたころは宿坊等も多く、おろそかならぬ所であつたのです。これが荒廃に至つたのは、悪名高い武藤家に犯され、武勇の上杉家に掠められ、一切の行法ともども一山を挙げて、羽黒に逃れ去つたからだといひます。

しかし、やがて縹渺ひょうびようとして眺望が開け、庄内平野がその全貌を現して来る。早くも遙か彼方右手からは月山がつさん、前方からは鳥海山ちょうかいさんが見えます。月山を背にしては城下町鶴岡つるおかがあり、鳥海山を背にしては商港酒田さかたがあります。加うるに、高館山はいつしか消えて、果てもなく連なる砂丘の防風林になり、西目や大山のことなど忘れてしまうのです。況んや、これから物語ろうとする加茂かもを、思いだすひともないであります。加茂は連亘する荒倉山と高館山に隠れた、眇然びやうぜんたる海港であ

ります。

すなわち、加茂からすればこれらの山に囲まれ、日本海へと開いている。風光すこぶる明媚ですが、これを加茂と呼ぶのは、荒倉山の出羽神社とともに、ここに加茂神社が勧請されたからだそうです。してみると、羽越本線はすでに越後でも、加茂という街を過ぎました。あれなども、おなじ縁起を持つものかもしれません。いや、そのようにして神々は街や町の名になりながら、渡って来たのです。それがあらぬか、加茂には神社が多いのです。寺が多いのです。よくこんな海港がこれだけの神社や寺を、持ちこたえられると思われるほど多いのです。しかし、これが日本海の海港の、特色をなすものでもあるのです。

いまはみな、日本海側を裏日本と呼んでいます。ところが、かつてはこれが表日本で、北国船の往還織るがごとく、港々に莫大な富をもたらしました。また、その富を求めて怒濤激浪に船を吞まれ、数知れぬ海難者を出しました。このため、かくも多くの神社や寺が建てられ、持ちこたえられて来たのです。殊に、加茂は加茂を目指した船がはいるばかりではありません。酒田を目指した船も嵐にあって、しばしば待避して来たのです。その上、連亘する荒倉山と高館山に隔てられているとはいえ、鶴岡は指呼の間にあります。庄内平野の富豪五人を挙げれば、三人は加茂にいるといわれたのも、宜なりといわねばなりません。

荒倉山と高館山のあわいの道を、加茂坂といいます。加茂を鶴岡と結ぶ大動脈をなすものです。これが峻しく容易でない。といって、加茂坂を避けられぬこともないのです。海沿いに由良へ行っても、荒倉山の裾を廻って庄内平野に出られるのです。湯野浜へ行っても、高館山の裾を廻って庄内平野に出られるのです。いずれも平坦な道で、時間はかかっても労は少ないのです。しか

し、ひとびとは勞を厭わず、時間を費やすことを嫌い、重荷を背負^{しよ}つて遮二無二加茂坂に登ったのです。いまでも即身仏^{そくしんぶつ}になって祀^{まつ}られている鉄門海上人^{てつもんかいじやうにん}は、哀れんで多数の信者を動員し改修しました。鉄門海上人にはひとびとの重荷に喘ぐこの嶮路が、この世の地獄と思われたのかも知れませんが。

鉄門海上人の後を追って、これまた即身仏になった鉄龍海上人^{てつりゆうかいじやうにん}が、トンネルを掘ろうとして地雷をかけました。しかし、時の県令三島通庸^{みしまみちゆみ}の決断を待つまでは、本格的な着工には至らなかったのです。かくて工事が着々進捗しはじめると、思わぬ騒動が起ったのです。これらの試みはみな鶴岡と直結し、加茂をいよいよ繁榮せしめようとしたものです。加わうるに、背負い子たちを地獄の労苦から救おうとしたのですが、地獄の労苦あればこそ、背負い子は妻子を養うこともできたのです。しかし、そんな騒動のごときは、三島通庸の決断の前には、ものの数ではありませんでした。

三島通庸は山形県の後進性を救うには、なによりも交通を整備するに考えていたようです。盛んに、トンネルを掘り橋を架け、不要と思われるほど道路をつくりました。しかも、そのつくるに当たっては極めて強硬で、こんな話もいまに伝えられています。三島通庸がこごと、道路をつくろうとしました。ところが、そこに跨がる豪家^{あうけ}があつて立ち退かない。三島通庸は怒って、立ち退かぬなら焼き払えと言いました。これを聞いた豪家の主は震え上がり、あの三島通庸ならばやりかねない。そう言つて、その日のうちに立ち退いたのです。三島通庸は薩摩のひとで、山形県民のごときは、敗残の賊徒に過ぎないと思つていたのです。しかし、山形県を今日あらしめている交通の整備は、みな三島通庸の方寸より出たものであります。

加茂坂トンネルの完成は加茂の大きな歓びとなり、背負い子の騒動などは忘れ去られてしまいました。事実、加茂坂トンネルは加茂に繁栄をもたらし、いよいよ繁栄をもたらすかにみえたが、それも束の間の夢だったのです。やがて日本海沿いに羽越本線が敷かれ、庄内平野にはいつて、鶴岡と酒田を結ぶに至ったからです。鉄道は船に比べて遙かに安全で、かつ速い。貨物の輸送、人の往来、すべてこれによって、往還織るがごとくあった北前船、北国船も姿を消し、加茂はたんなる一漁港になって、加茂の加茂たるゆえんのものを失ってしまったのであります。

かつて加茂を訪れたことのあるひとが、数十年後にふたたび訪れて、あまりにも加茂が変わって、いないのに驚いたといいます。それは加茂が繁栄に見放されはしたもの、なお氣息奄々きそえんえんとして、むかしの姿を保っているというのではありません。むかしの姿を保ちながらも荒廃し、荒廃しながらもなんの手も加えられず、そのながい年月捨て置かれたままになっていたからです。たとえば、埠頭に沿って威圧するような大きな倉庫があります。むろん、かつてはこれにぎしりと船荷が詰め込まれていたのです、いまもなになに様の倉庫と呼ばれているが、そのなになに様も、もはや加茂にいないのです。よく見ると、瓦屋根も白壁も荒らけ切っています。おそらくは雨露を凌ぐに足らず、鼠の跳梁するに任せているのでしょうが、解体して他に利用しようにも、利用する方途がないのです。

加茂にはまた幾つかの塩倉があります。塩は加茂の重要な交易品のひとつでしたが、これも戸口の南京錠は毀れ、なにかに使われているという様子もありません。埠頭から加茂坂トンネルへとちよつと登ると、おなじような木造の二階屋が並んでいます。庄内地方では遊女をあねまあねまといい、遊女屋をあねま屋と呼びますが、これがそのあねま屋なのです。そう言えば、そんな面影が残って

い、どことなく民家と違って、粹な造りのように思われます。しかし、嬌笑はおるか人の声さえなく、空しく空家になっているのです。あ、ね、ま、屋の並びの向かいに、平屋建ての家があります。花柳病に特効のある漢方薬を売って、繁盛していたそうです。いまでも庇の上になれいいい金看板が出ていますが、見るからに埃臭く、ここにも人の住む気配はないのであります。

サキも幼いながら、こうした加茂の盛衰を知っていました。サキの家は貧しく、屋根も木端葺きに石を置いて、僅かに風雨を凌いでいる。その石も昔むして、つい見過ごされてしまいうる路地裏にありました。加茂の盛衰はこの家をも見過ごさなかったからです。第一、サキの家は代々日傭の力仕事をしていた、じさま（爺さん）のじさま、ばさま（婆さん）のごときは重荷を背負って、あの加茂坂を越えていたといひます。それをじさまはみょうに自慢にしていよく話すばかりか、ときには自分が加茂坂を越えていたようなことを言うのです。もっとも、サキがもの心のついたときはすっかりとしをと、口ほどもなく、力仕事はもう無理なのです。

しかし、戦争がはじまって、働（はたら）きど（労働者）が少なくなつて来たからでしょう。便利屋まがいの仕事を頼まれることもあるのです。たかだか、大山、湯野浜、その他の在所に届けものをするぐらゐなこと、たいていはばさまに言つて来るのですが、じさまが黙っていない。ばさまはとしをとっている。腰も曲がっていると、自分が行くとうとするのです。ほんとに、じさまはばさまより年下（としだ）です。だとしても、じさまもとしをとっていないわけではありません。ばさまは腰が曲がっています。これとて、じさまも腰が曲がっていないとはいへないのです。

そればかりか、世に言う蚤の夫婦で、ばさまがじさまより大きいのです。これがじさまの引け目といえ、引け目のひとつで、時にばさまは文字なし（文盲）だ。祝儀袋を買いにやったば、店のばさまも文字なしで、う。ゴム判出して、これでええんでろかと言う。それをええんでねえかと相槌を打ったもんださけ、御霊前などというゴム判押してもらって来たなどと笑うのですが、ばさまはばさまで、文字なしは文字なしでもお札はわかる。お札せえわかれれば困ることはねえと笑っています。ばさまはほんとによく笑い、笑いだすと止まらなくなるのです。ばさまにすればせっかくじさまが行くと言うものを、行かせてやれというつもりですが、じさまはすぐまだまだ働くことができます、若いものに負けぬといった気になってしまふのです。

さアそうなると、じさまはすっかり張り切って、家に小魚でもあれば、それまで添えて持って行く。これで喜ばれぬはずはありません。こんどもじさまが来てくれのなどと言われて、お返しに野菜を貰ったりして来るのです。そろそろ魚は農家にとっての、野菜は漁港にとっての貴重品になっていました。しかし、じさまはなんの取柄もないが、正直にかけては上にバカがつくと自慢していたほどのお人好しで、お返しに野菜を家に持って帰ったりはしないのです。じさまの仲間はほとんど死に、生きてはいても立ち上がれないような者がいるのです。それなのにとにかくも生きていて、稼がせてもらう。それだけでじさまは嬉しいので、貰った僅かな駄賃で計り売りの焼酎を買い、ひとときを酔えば後生楽、後生楽で、他に望むところはないのです。

サキのだだ（父親）は漁の手伝いをし、アブレれば日傭に出る。が、（母親）は魚をブリキの缶に入れ、背負い商いをして歩いていました。これまたアブレれば日傭に出る、謂わゆる浜のあば（女）なのです。嫁が年上（としよ）というのは、サキの家の宿命のようなもので、が、がが二十五で来たと

き、だ、だは十五だったといひます。というのも、稼ぎ手が一日も早くほしかったからです。そうしなければ食っていけなかったからです。それをひとはみぞけながる（同情する）のですが、

「年上のががはがで、年下にはねえうま味があるもんだ。おらゝ経験から言うなださけ」

じさまはどこ吹く風というようにそんなことを言つて、ばさまに笑われるのです。

「ほ、どげだ経験だや。じさまがまたほろけた（バカな）こと言うて」

「ほろけたこと言うのも、後生楽のうちだ」

じさまが笑うと、ばさまがまた笑ひだす。なにか大らかなところがあつて、じさまはばさまに頭が上がないばかりか、頭が上がないのを喜んでさえているようです。加茂には坐して手を拱こまねきながら、なにになに様さまと呼ばれる旦那衆がなん人もい、それがおのおのなん代にも互つてゐる。しかし、じさまに言わせると、これが世の中というもので、それをなんだかんだと言うものがあれば、かえつて怒りだすかも知れません。

秋の夜道をじさまがピンを下げて帰ると、だ、だが懐おきに手をかざして、囲炉裡いろりのそばにあぐらをかいてゐる。サキはもう学校に上がつてゐるというのに、ばさまの膝にもたれ、みなで談笑してゐましたが、がががじさまに氣がついて、じさま、戻つた！ と言つと、あらためてじさまに、

「ご苦労だったの」

じさまと入れ代わりに降りて来て、土間にも薄暗い裸電球をつけました。土間には竈へつういがあり、水屋がつくられています。夕餉の仕度はいつもじさまの帰りを待つてされるので、余程のことがない限り、腹を空かしてもみなは待つてゐるのです。

じさまはかまち櫃に掛けて、ずらつと並んだ地下足袋のハゼを上から一つ一つはずし、ががのくれた雑

巾で足を拭うと、畳に上がって、よいしやとだ、だを右手に囲炉裡の横座にあぐらをかきました。横座は家の主の坐るべきところあるじです。じさまはだだにががが来たその日から、わア（お前）はもうこの家の主だ、でんと構えて横座に坐れと言ったのです。だだはばさまに似てからだは大きいが、ただ笑うだけでじさまがいけないときすら、横座には坐ろうとしない。むろん、じさまを立てているので、じさまにはその心がまた嬉しいのです。

「だだ、今夜も船は出ねえだかや」

しかし、じさまは船が出ないのを案じているわけではありません。船が出ないのでだだ、がこうしていてくれるのを、むしろ喜んでいるのです。

「ンだ、月夜だもんだしの」

だだが頷くとばさまが笑うのです。

「じさまもほろけた（呆けた）もんだの」

「ほろけた？ ほろけた、ほろけた言うさけ、ほんとにほろけるでねえか」

じさまも笑って、昨夜もだだにおなじことを訊いたのを想いだしました。いや、そればかりではありません。この帰りに白々と道を照らす月を眺めて、今夜もだだがいる。そう思って浮き浮きし、唄さえ歌ったのです。月夜にはまったく漁がないとは言えないが、あっても燃料の油代にもならないのです。その上、その油もそろそろ手に入れがたい、貴重なものになっていました。

「じさま、潮目が変わったんであんめえか。このじよ（この間）からでって（てんで）不漁で、月夜が過ぎても漁はねえみてえな気ィしての。ががも稼がせられねえもんだし、日傭でもあればと思うんどもや」

そうは言っても、だ、だにも暗い表情はありません。とにかくこれまでこうして来れた。これからもなんとかしていけるさ、といった明るさがサキの家にはあるのです。

「ンだ、潮目が変わったんだや。変わるさけ、また漁があるときもあるってもんだ。じ、まが一度でも嘘まけたことあんだかや。そのうち、だ、だもが、音上げるほど忙しくなる。それまでは後生楽だ。まんず、飲めちゃ。今夜はじ、まの稼ぎだで」

じ、まは茶碗を取ってだ、だにやり、ピンを傾けてなみなみと焼酎をついでやりました。飲むことばかりは、だ、だも二十前はたもから飲んでいました。それはじ、まが強い、強いられるままに飲めば、それそれ、それで立派なだ、だというもんだ。子までなして、飲みもしねえでいられるもんでねえ、などと喜ぶからです。しかし、じ、まはひとりで飲むのが気がひけるからで、そうだということをだ、だも知っていたのです。

「あいや、アブラコどこさ行ったんでろ。じ、まにと思つてとって置いたんでも、どこの猫が引いたんでろか」

土間だが、がのそんな声がある。むろん、じ、まが引いてこっそり土産に持って行ったのです。アブラコは磯魚でなかなかうまいのです。漁として取って来るのではないが、だ、だはじっとしているのが嫌いで、漁に行かぬとなると、そんな磯魚でもとって来るのです。

「猫だ、猫だ。猫はどっさもいるもんださけの」

じ、まが首を縮めて、だ、だを見やると、

「ンだ。ば、まが捕えてくれっかの」

とば、まは笑いましたが、その笑いがまた止まらなくなりました。ば、まは歯が悪いのです。だ

ども、おらは齒がええというのがじさまの自慢ですが、二人にはながく子がありませんでした。いまも加茂坂トンネルの加茂側口に赤い鳥居を立てた祠があります。どう見ても稲荷神社ですが、じさまはなにかさう思ったのか、それを鉄門海上人の祠と信じて願を掛けたりしていました。しかし、いっこう験がなくてほとんど絶望していたとき、だだが生れたので、

「じさま。鉄門海上人様の功德、功德というんども、ようあげだとしてつくれたもんだの」

と、ひやかすものがあります。いや、なにかで寄り合うと、必ずその話が持ち出されるのです。じさまは待っていたように、

「齒ばかりでねえ。ちったゝ霞んだども、眼もまだ見える。これで畑せええええ、いまもつくるで」

「こうッ。したば、なにか秘訣でもあんなだか」

「ある、ある。真言だて」

「真言？ 真言ってどげだもんだや」

「こればかりは教えられねえ。真言秘密というでねえか」

じさまの言うことは勇ましいが、あのほうのごときは、遙かむかしからたわいなく、飲めばすぐ酔って、驚くような酤をかくだけが能なのです。

じさまは照れてなんとなく目をそむけると、土間に流木がある。しかも、切り揃えてきちんと積んであるのです。

「こうで、(沢山) 流木があんでねえか。だだが背負って来ただかや」

「ンだ。じさま、稼がせて、おらがねまつても、(なんにもしないで) おられねえもんだしの」

と、だ、だは笑うのです。だ、だはあげたとしでも、が、がもろうて子をなせば、貫禄がつくもんだの、などとひとによく言われるのです。しかし、笑うとまだまだ童顔が残っています。

「稼ぐいうても、じ、まの稼ぎはこの焼酎だ。まだ行けるんでろ。せっかく、だ、だが背負て来てくれたんだ。どんどと燃して、後生楽といこうで。あすはおらも流木背負いさ行く」

「じ、ま、ま流木背負いさ、行かせられるもんでねえ。じ、ま、まが腰が曲がったのも、おら、た（おらたち）のために重い荷背負って、加茂坂さ登ってくれたからでねえか」

だ、だはじ、ま、まがそろそろ酔って来て、なん百遍となく話したじ、ま、まのじ、ま、まのことが、自分のような気になって来るころだと思ったのです。でなくても、早くそう思わせて得意になってもらいたかったのです。

「ンでね。腰曲がらねば、重い荷は背負えねえもんだ。ンださけ、四十貫も背負えたんだて」

「あいや。じ、ま、まの荷も四十貫になったか。もとは二十貫てら、三十貫てら聞いたんどもものう」が、がが夕餉を整えました。ば、まは眠っているサキを促し、ち、や、ぶ、台に座を移しましたが、そこでもまだ笑っているのです。

「いや、四十貫だ。四十貫というたでろ」

「ンだか。ンだか」

「ンだ。こうッ、なに話そうとしたんでろ。ば、ま、まが笑うてばしいるもんださけ、忘れてしました」

「登り坂より下り坂がこわい、というんでねえでろか。おら、な、なんでもそげだものかと思うて聞いたんどもや」

「ンだ、ンだ。なんでもそげだもんだ。だ、だはじ、まよりよう覚おぼつとるでねえか。ちょっと躓つまずいたば、どんどと走って、足が止まらねえ。加茂坂は目が廻るほど急だもんだし、背負った荷は四十貫なんどろ。ンだ、たしか四十貫だ。命はねえと思つたんども、鉄門海上人様アとおらんだは四十貫と足が止まった。だ、だも海さ出て危ねえこともあんでろ。そげだときは鉄門海上人様アとおらぶんだ。お上さ梶棒振って刃向かうたのも、トンネルさ反対したんでねえ。トンネルは文明だ。文明は便利だもんだ。ンだども、鉄門海上人様が加茂坂を開ひらけてくれた。あんときはなん千というひとが、鋤くわ、鋤くわ持もつて助すけに出たというんでろ。それ思うと、おら罰あたると思うてな。見ろ、便利は便利だども、加茂は悪くなる一方でねえか……」

これがあのじ、まかと思えるような言葉ですが、口ほどもなく酒に弱くなり、ついうとうととするのです。その癖、ががが掻かき巻まきを持って来て、

「じ、ま、飯も食かんねえで寝るだかや。うたた寝すれば、風邪かぜひくもんだ」
じ、まに掛けてやろうとしても、

「ンだ。鉄門海上人様を忘れるでねえ。なんたてだ、だは鉄門海上人様の申し子ださけの」

手で払おうとするのですが、意識はもう朦朧もうろうとしていたのであります。ば、まもサキも眠ったようです。といって、だれがどこに寝るといった、部屋があるわけではありません。そこらに布団をかいて敷いて寝るのです。だ、だがががはじめてちやぶ台に向かつて、差し向かいになる。が、がは黙ってだ、だの茶碗に飯を盛っていましたが、ちょっと耳を澄ますようにして、

「風が出たんでねえでろか」

「ンだの」